奈良教育大学紀要　第63巻　第１号（人文・社会）平成26年
Bull. Nara Univ. Educ., Vol. 63, No.1 (Cult. & Soc.), 2014

ＥＴＣ理論からみた描画法における「素材」と創作過程
―考案者の表現空間に対する意図の検討から―

市　来　百合子　奈良教育大学次世代教員養成センター

（平成26年５月７日受理）

Study of Art Media and Creative Process based on Expressive Therapies Continuum in Projective Drawing

Yuriko ICHIKI
(The Teacher Education Center for the Future Generation)
(Received May 7, 2014)

Abstract

There has been only limited discussion on materials used in projective drawing techniques and the relationship to the creative process of the drawings. The present research examines the initial circumstances when the inventors of the five notable techniques (the Baum test, the Tree Test, the House-Tree-Person test, the Landscape Montage Technique, and the family drawing test) selected the materials for the tests. The results show that the techniques with black pencil are mostly assessed through the examination of the artwork not of the creative process. The de-gree to which usage of the materials affects the creative process and assessment results varies by the tests. We conclude that individual reactions to the materials should be considered to under-standing personality in assessment and the active discussion about the materials should be made for the better assessment for the future.

キーワード：描画検査，素材，ＥＴＣ理論

Key Words：Art media, The Expressive therapies continuum, Projective drawing technique.

１．問題

描画法はバウムテストをはじめとして，ＨＴＰ，家族画など様々な種類があり，臨床現場で有用な方法として発展してきた。小川（2008）は，1986年，1997年，2004年と３回にわたり，日本心理臨床学会の会員を対象に心理検査の使用についての調査を行ったが，1997年と2004年の２回とも，最も使用頻度の高い心理検査は，描画法（バウムテスト）であったことを示している。描画法は，時間的な負担が少なく，どのようなクライエントにも実施しやすいために，様々な心理臨床場面で，用いられてきた。

一方，同じように，描画あるいは視覚的表現行動を利用して心理的健康を促進する「アートセラピー」という分野があり，そこでもアセスメントとして様々な描画法が存在する。アートセラピーでは，多様な画材や道具を用い，創出された表現物は心的世界がそれらの有形物である画材を通して実体化されたものと考えられている。アートセラピーの創成期においてパイオニアの１人であったKrammer（1983）は，よりよいアセスメントのためには，完成作品のみを分析解釈するのではなく，創作過程全体をとらえることが必要であり，そのためには「素材」に対する反応の個人差をみることが重要であると説いた。例えばKrammerのArt therapy evaluation for childrenは，子どもに１）鉛筆　２）絵の具　３）粘土の順に提供し，それぞれの画材に対してどのような反応を示し，表現していくかについて質的に検討する検査法である。

このように，道具や画材についての視点を心理臨床の場に持ち込むことは，これまでほとんど為されてこなかったと思われるが，画材や道具が描き手の心理状態や創作過程に大いに影響を与えることは容易に予想される。

市来・内藤・金井（2005），市来（2009）は，パステルと色鉛筆による描画過程をそれぞれのＰＤＩの逐語

録，行動観察の記録からグラウンデッドセオリーアプローチによって比較し，両者が画材によって異なる創作過程を呈することついて考察した。色鉛筆では，対象物との距離感を適度に保ち，テーマを決めてから形態を完成させていくのに対して，パステルは，その発色のよさから，情動が喚起され，粉による触覚が刺激され，解放的で退行促進的な過程を促すことが明らかとなった。

アートセラピー先進国である米国の当該領域では，素材の心理的影響についてExpressive Therapies continuum（以下ＥＴＣ理論と称す）（Lusebrink，1990）の論考が「最も引用されている枠組み（the most commonly cited framework）」（Moon，2010）とされている。ＥＴＣ理論では，素材の物理的特性の程度を「抵抗性（resistive）」と「流動性（fluid）」を対極とする１直線上として仮定し，各素材をそのスペクトラム上に定位して理解していく論考である（図１，２）。素材の抵抗性とは，物理的に圧力を加えないと形が変わらないもの，固いものであり，構成していくために圧力を要する素材を指す。流動性とは，柔らかで自在に変形させることができる素材である。その後Hints（2009）は，ＥＴＣ理論を発展させ，前者を情緒的な体験を引き出す素材，後者を認知的な体験を引き出す素材として，その発達段階についても整理し，クライエントの支援に必要な素材や表現環境を設定するのに有用な検討を行っている（図３）。

このように，素材によってクライエントがどのような影響を受け，描画に反映させているのかについて理解することは，描画のアセスメントにとっては欠かせない検討事項である。

本稿では，まず日本で頻繁に用いられている描画法について，考案者がどのような意図をもって，素材を選択し，どのような創作過程を意図しようとしたのかを整理していきたい。次に，被験者が素材からの影響をうけてどのように創作を体験をするかをＥＴＣに照らして考察していくことを本研究の目的とする。

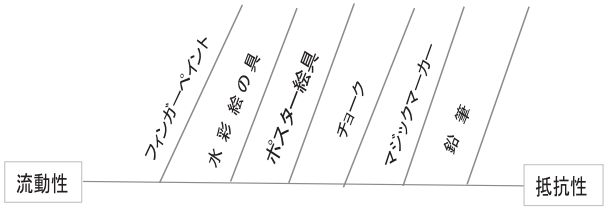

図１　２次元の素材のスペクトラム Lusebrink（1990）

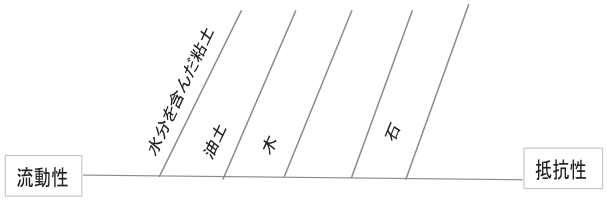

図２　３次元の素材のスペクトラム Lusebrink（1990）

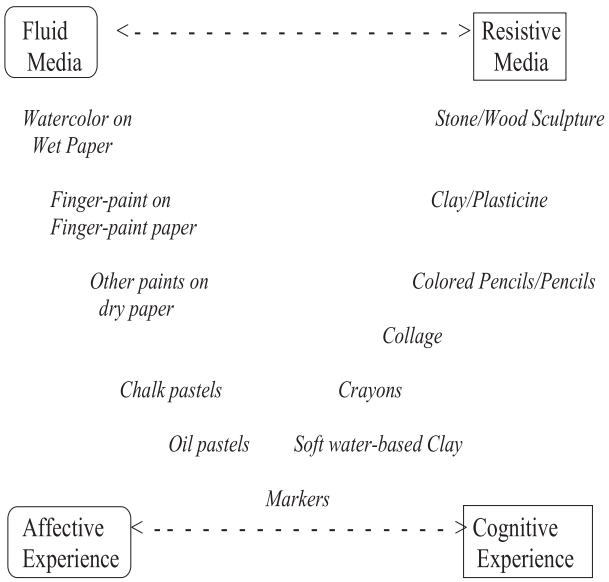

図３　Media Properties and Experience, Hints, 2009（素材の特性と体験）

尚，筆者は2010年の研究以降，画材や道具について，クレヨンや鉛筆，コラージュのような２次元だけでなく，粘土や折り紙などの３次元表現も含め，表現を仲介する重要な媒体として研究を進めることとし，それらを「素材」と呼ぶこととした。本稿でもそれに倣い，描画法で使用される画材や道具，紙などを「素材」と称する。

また，描画検査はその絵について語りを受け止めてもらう体験（ＰＤＩ）を通して心理療法としての意義をもちやすいことから，本研究では特に文脈の中でテストの意味を強調する場合以外は描画法と記すことにする。

２．研究方法

2. 1. 描画法の選択について

杉浦・香月・鋤柄（2003）は，日本の描画法を概観しているが，その中で1920年から2003年までの国内出版の書籍で多いものの順に，バウムテスト，ＤＡＭ，家族画，論文ではバウムテスト，家族画，風景構成法の順であった。本稿では，ＤＡＭの代わりに人物画を含むＨＴＰおよび杉浦が挙げた各描画法について，どのような「素材」を使用して表現空間を誘発しているかに関して解説を試みた。また考案者のアセスメントに対する意図や姿勢についても整理して考察した。

３．結果

下記に，５種類の描画法の「素材」と考案者の創作過程に対する考えをまとめた（表１）。

表１　各描画法の素材および創作過程について

	紙	サイズ	用具	創作過程に関する考え方
バウムテスト（Koch，1957（岸本・中島・宮崎訳，2010））	白く，あまりツルツルしていない，標準規格の紙（例えばタイプライター用紙など）	Ａ４（21×29.7cm）	中軟質から軟質の鉛筆／消しゴム（４Ｂ程度）	やや硬めの表面が滑らかな下敷き，消しゴム使用可＊描画過程を観察し，時間をメモしておく。消されたものもまた重要である。
樹木画テスト（Bolander, 1977（高橋(訳)，1999）	記載なし	21×28.5cmの事務便箋用のサイズ，（同じ縦横の比率の大小の紙）	「自分の好みの描画の道具，例えばマジックペン，ボールペン，万年筆や好みの濃さの鉛筆」	「p64我々は描画の過程は絵の解釈には全く関係がないと思っている。」 p65「テスト状況を最小限にしたいので，２枚以上描かせることはめったにない」「描いた直後に一定の質問をするのは，不必要で不適切だと考えている。（もちろん自発的な言語化や，絵の分析にクライエントからのフィードバックをもちいないというわけではない。」「解釈者の先入観」を避けるためにも，最初の解釈の段階では「半目隠し分析」が最善である」
ＨＴＰ（Buck, 1948, 1966）	画用紙（drawing paper）	8.5×11インチ	1）No2の鉛筆と消しゴム 2）Jumbo Crayon８色	Buckの色彩ＨＴＰとは，黒鉛筆で通常のＨＴＰを描いてＰＤＩを行った後に，クレヨンで３枚描く。
ＨＴＰＰ（高橋，1974）	白ケント紙４枚	Ｂ５（18.2×25.7cm）	ＨＢの鉛筆２～３本と消しゴム	時計あり。ＰＤＩは重要である（参考のために各描画についての質問項目も付加されている）。
風景構成法（中井，1997）	やり直しを請求するための数枚の画用紙	Ｂ４からＢ５まで通常Ａ４判	黒のサインペン，通常24色のクレヨン（クレパス），色鉛筆，色サインペン，ボールペン，絵具等も可	施行の手続きの詳細は本文
家族画（ＫＦＤ）（Burns, & Kaufman, 1972（加藤・伊倉・久保（訳））1975）	白画用紙	8.5×11インチ	ＨＢ（または２Ｂ）の鉛筆，消しゴム	描画終了後に描かれた家族員像，その行為内容，描画順序などを確認し，用紙余白に記入する。制限時間なし。

3. 1. バウムテスト

近年新たに岸本・中島・宮崎（2010）によって邦訳されたバウムテスト第３版によると，用具は表にあるように，「白くあまりツルツルしていない標準規格の紙（Ａ４）」と「中～軟質の鉛筆」で，下敷き，消しゴムも使用可としている。ここでの紙は，「例えばタイプライター用紙」と書いており，その下に下敷きを引いてもよいとしている。そこで「中～柔らかめの鉛筆」という設定は，紙面で描いた時，多少なりとも引っかかり感を意識しつつも，ストレスの少ない滑りのよい書き味による表現空間をKoch（1957）が意識していたのではないかと推測される。「ツルツルしていない紙」という表現は，Lusebrink（1990）のExpressive Therapy Continuumで言うところの「resistive（抵抗性）」の方向性をもつ素材特性であり，表現の受け皿としての紙の質は，抵抗感（resistive）や堅さを保持しながら，柔らかい鉛筆で筆を滑らせる表現の自由を許容していると言うことができる。

Koch（1957）は，「バウム画を心理診断の補助として用いるという考えは・・・（中略）・・・職業コンサルタント，Emil Juckerに由来する（p.19）」と述べており，この手法に魅せられたKochが自らの専門である筆跡学に基礎をおいた解釈法により分析法を発展させ，それを他のカウンセラー，教育者，サイコロジストに広めていった。これらの用具は，おそらくKochの職業カウンセラーとしての業務の中で最も身近で効率的なものであったことが推測できる。

Koch（1957）のバウムテストは，心理テストとして大きく発展を遂げたが，彼が目指したものは，出来た作品を実証的に数量的指標に分けて，判別・分類を目指すものではなく，「総合診断」であったことは岸本（2006）も指摘するとおりである。つまり，用具はある程度限定されているものの，「消しゴムを使って描き直す」や「時間の計測」などの創作過程についても大いに着目していたと思われる。このことは，Kochが「表現とは，描画に何が描かれているかということよりも，描画がどのように描かれているかということに関係がある（p.56）」と述べており，描いた人を総合的に「見立て」ようとしたことに他ならない。

3. 2. 樹木画テスト

Bolander（1977）は，Buck（1948）のＨＴＰやKoch（1957）のバウムテストとは異なる立場で「樹木画テスト」の解釈を主張した。

「樹木画テスト」の実施法について，まず紙について留意すべきは，用紙の縦と横の比率（欧州で実施する時は21×28.5cm，米国では8.5（21.6cm）×11（27.9cm）inch）だけである。この比率を守りながら，事務便箋の

サイズの用紙，縮小したサイズの用紙あるいは拡大したサイズの用紙を用意し，紙の大小をクライエントによって変えると述べている（p.65）。守るべきは比率であって，サイズや紙質ではない。

また鉛筆についても，特にその濃さなどについて言及しておらず，次のように述べている。

「特定の濃さの鉛筆を用いると，異なる人々の絵のストロークの性質を比較しやすいが，たいていの人は自分の好みの濃さの鉛筆をもっている。問題は自発的な自己表現であるから自由に描画の手段を選択できれば，その人に特徴的な作品が描かれるとわれわれは考えている（p.64）。」

総じて言えば，「樹木画テスト」を考案したBolanderの場合は，どのような状況で表出するかは問題ではなく，むしろ本人の意思あるところで自発的に表現されたものであれば，ＰＤＩさえ必要なく，熟練した読み手であれば解釈が可能であると言うものである。また「描画の過程は絵の解釈には全く関係がないと思っている。」とも述べていることから，Bolanderの関心は，いかにその人らしい描画を採集するかであり，テスト場面でそのような描画が得られそうにない場合には「標準の実施法を犠牲にする価値がある（p.64）」とまで述べている。「採集した中で最も魅力的な絵の１つは，中華料理店で紙のランチョンマットの裏に描いてもらったものであった」と述べ，このことを如実に示すエピソードを記している。

3. 3. House-Tree-Person（ＨＴＰ）

ＨＴＰは，Buck（1948）によって考案された家屋，樹木，人物を描いてもらう３枚の描画法である。Buckの原法では，黒鉛筆のみによる描画であったが，1966年以降，通常の３枚に加えて，色彩を用いて描く系列を課している。つまり，通常の３枚の描画とそれについてのＰＤＩを行い，その後に８色のクレヨン（赤，緑，黄色，青，茶，黒，紫，橙色）のセットを与え，同じ課題を施行するというものである。Buckが色彩の使用を加味したのは，色彩がパーソナリティの深層に触れ，精神病理の診断や予後の理解に有益であるとしたからである。また無彩色に加えて彩色画の課題，すなわち情動的な刺激の提示が付加されることによって，被検者の情動の統制や，耐性を理解できるとしている（Buck, 1966 p5）。

Hammerは，1969年の著の中で，ＨＴＰの施行に関して従来の鉛筆，クレヨンに加えて水彩絵の具を用い，連続で描かせる方法について述べている。第２段階で用いるクレヨンは，Jumbo Crayola Crayonsという大きめのクレヨンであり，それがassociative value（連想的な価値）を拡大し，childhood adjustment level（子どもの頃の適応レベル）を容易に引き出すとしている。

先のBuckの方法では，初めの鉛筆とクレヨンの間に，絵についての話をするＰＤＩ段階を設けるが，それはクライエントに感情的な体験をもたらすためである。そして第２系列でのクレヨンによる描画は，第１段階の鉛筆の描画とＰＤＩで現れる情動的な状態を確認したり，証明したりするための行動的なサンプルであるとする。つまり黒鉛筆で十分にカタルシスが得られた被検者は，色彩に入る際にある程度解放されていると仮定し，その段階ではより色彩を統制していくことが可能かもしれないとしている。

逆の場合は，情動的には不安定となっており，色彩段階では被検者の無意識のニーズや防衛機制がさらに開示されていくであろうとしている（Hammer, 1958 p.209）。Buck（1966）が，面接中描画によって言語化が促進されることを“Pencil release”と呼んで臨床的に有効であることを説き，更に色彩素材を追加して，その行動の比較から査定しようとした意義は大きいものであった。

日本では高橋（1967）が，Buck（1948）のＨＴＰに，Machover, K（1949）の人物画テストを組み合わせ，４枚目に３枚目と反対の性別の人物を描かせる形でＨＴＰＰを提唱し，広く使われている。高橋（1967）の原法のＨＴＰＰでは，使用道具はＢ５版のケント紙とされており，２系列目の色彩は含まれていないので，我国の臨床場面では黒鉛筆のみを使用する場合が多い。

3. 4. 風景構成法

風景構成法は精神科医である中井（1970）によって考案され，発展していった描画法であり，「あまり規格化されていないのはテストでないからである（p4）」として，その緒が，中井の精神科医としての臨床的な知見から発していることを強調している。中井（1997）が風景構成法の「素材」や創作過程について言及している部分を以下に示す。

・机の上にはやり直しを請求できるための予備用紙という含みで数枚の画用紙とサインペン，クレヨンを置く。画用紙の大きさはＢ４からＢ５までそれぞれ「大きさによる効果」があり，小さいほうが単純な画になりやすい。

・特に分裂病者は色の重ね塗りをしない傾向が強いので，クレヨンは24色程度が望ましい。例えば12色くらいだと粗大な画になり，画に対する治療者の共感性が低下し，自然に足が遠のくものである。色鉛筆，細いサインペン，ボールペン，鉛筆が一緒に置いてあってもよい。硬く細い筆記用具を選ぶ傾向の人にも門を開くためである。さらに絵具などもよい。

・彩色の段階では，別室で独り行う方がよいこともある（pp.4-6）。

用いる主な道具はサインペンで，まずはアイテムを描きこんでいく。山中（1984）によるとサインペンを使う理由は，彩色によってみえなくなった素描線が裏からも認められること，消しゴムを使えないことのためである。このことについて皆藤（1997）は，「（消しゴムを使えないこと）は・・・・心的負担になるが，その反面，風景構成法のもつ「構成」の特性を保護する（p.11）」とその特徴を積極的に意義づけている。

中井（1997）は，彩色画材や紙の大きさについて様々な種類を許容しており，クライエントに合わせて用いると述べている。また，１人でも部屋に残しておけるクライエントの場合は別室で彩色させてもよいと述べている。皆藤（1997）も，「これ（黒サインペンと24色程度のクレヨンかクレパス）に厳密にこだわる必要はない。経験上よいというだけである。描き手によっては画用紙をつなげて使うこともあるし，絵の具を使うこともある（p10）。」と自由度の高い表現空間を許容しているが，それは，皆藤が同著の中では「もっぱら心理療法の中で用いている」としているところによるものと思われる。

風景構成法が，他の描画テストとは異なり，創作空間の情景や細かな配慮を記述してあるのは，その発生自体が統合失調症患者との問診や治療のやりとりの中から生まれ，療法的な意味合いが強いことによると思われる。

3. 5. 家族画

家族画の種類は多く，Hulse（1951）のFamily Drawing Test（ＦＤＴ：あなたの家族）やDraw-A-Family（ＤＡＦ：ある家族），また Kinetic Family Drawing（ＫＦＤ：「家族が何かしているところを描いてもらう」）など様々である。

中でも，ＫＦＤは，Burns（加藤・伊倉・久保（1975）翻訳）によると，8.5×11インチの白い無地の画用紙に鉛筆（No2）を用いて「あなたも含めてあなたの家族の各々が何かをしているところの絵を描いてください」と教示する。その後，「検査者は，そこで部屋を出て，時々チェックしにもどってくる」としているので，創作過程を観察しないことが示されている。

しかし，日本にＫＦＤを紹介した加藤は1987年の著の中で，ＫＦＤを構造化された場面で心理診断として使う場合と，療法的に用いる場面の両方を区別し，後者では「必ずしも鉛筆画でなくても，マジック，クレヨン，色つけできるボールペンを使ってもよい」として「患者の描画作業や彼が時々発するコミュニケーションについていくことである」と，信頼関係を形成することの重要性を述べている。

また高橋（1986）は，「家族画テスト」の手続きの紹介の中で，「・・・1984年・・に行われた第１回家族画研究会で，共同して家族画の研究を進めるために話しあわれた方法である」として，ＨＢ鉛筆と12色のＪＩＳ企画の色鉛筆，そしてＢ４版の白画用紙を示し，描画中の観察も必要であり，順番や態度を記載しておくように記している。

４．考察

4. 1. 創作過程とアセスメントの関係

同じ「木」を描かせるにしても，Koch（1957）とBolander（1977）では創作過程への関与に関する考え方が大きく異なっていた。Koch（1957）は，消しゴムの使用に関して，描き手がどのような点に注意を向け描き直すのかといった創作過程全体を俯瞰してアセスメントをするのに対して，Bolanderは，抹消，中断は問題のヒントを得られることは否定しないまでも，解釈に熟練すれば描画中の行動を観察しなくても，完成品から問題領域がわかるので，観察の手数を省いてきたとしている。Bolanderにとって重要なことは，表現者がいかに自然に，また主体的に自己表現を行うかであり，それを得るためには，標準化された「素材」や描かれる環境などの諸条件はむしろ犠牲になっても構わないし，ＰＤＩや作者の事前情報はむしろ正しい解釈の妨げになる時さえあるとした。

創作途中の検査者の離席については，ＫＦＤの原法では上記のように可能であると述べられているものの，日本で正式に「家族画テスト」の手続きを定めた際には，描画中「少なくとも描かれた人物の順番と描画中の態度」を観察するように勧奨している（高橋，1986）。

風景構成法については，彩色の際に，初回は同席するように書かれているものの，一人にしておいてもよさそうであれば，離室もあり得るとしている。

Bolanderは，離席について「観察されていない時は，全体として「テスト場面」という変数が縮小されるので，・・・（何人かのクライエントは）より意味のある絵を描いた」とし，「希望すれば家で描いて持参することも許している（p65）」と記してその必要性を認めていない。作者が意識的に隠蔽することは根本的には不可能であると述べている点は興味深い。

総じて言えば，それぞれの描画法は，考案者によって創作過程への着目の度合いに差がみられた。黒鉛筆を道具とする描画法の中でも，Bolander（1977）による樹木画のアセスメントでは，創作過程の論点はなく，作品分析が中心であった。バウムテストやＨＴＰＰ，ＫＦＤでは，考案者らは描く順番，抹消などの描く態度に注目するように記しているが，そこからどのような視点で行動観察を行い，査定するかについて内容の明示はなかっ

た。

また療法的要素を加味する場合に行う家族画や風景構成法，Buck（1966）のＨＴＰでは，クレヨンなど他の画材の使用を認めてはいるが，本研究で問題としている「素材」の特性などから体験への影響を考えるという観点はほとんど記されていなかった。

これらの結果は，心理検査バッテリーの１つとして用いる描画法においては，これまでは，創作過程の行動観察からアセスメントを行うアプローチが明確に論じられてこなかったことを示している。この点について，今後は，多様な「素材」を利用するアートセラピー領域から素材理論を援用し，検討していくことが，新たなアセスメントの方略を考える上で有用なのではないかと考える。次に，描画法で用いられている「素材」の体験をＥＴＣ理論から考察していく。

4. 2.「素材」についての検討

4. 2. 1. 黒鉛筆の特性について

５つの描画法の「素材」をみると，風景構成法とBuckのＨＴＰの第２系列以外は，黒鉛筆で描かせている。またKoch（1957）が柔らかい４Ｂ程程度の濃さを標準とするのに対して，それ以外は，ＨＢ（米国のNo2）の濃さが標準で，どの描画法も消しゴムの使用を認めている。

描画法は心理検査の中ではバッテリーとして用いられることが多いため，検査時の負担を考えて簡便であることが求められ，また検査者側の管理面や，研究の蓄積・比較と言う点からも黒鉛筆は広範に使用されるのに十分な理由がある。

この黒鉛筆は，ＥＴＣ理論理論で言えば，「resistive（抵抗性）」の方向性をもち，ＥＴＣ理論の発達段階に準えば「知覚／情緒（perceptive/ emotional）段階」にあたる。その前の「感覚運動（Kinesthetic/ Sensory）段階」を経て，「知覚／情緒段階」においては，自分のまわりの世界を発見しながら，形態＝スキーマを切り出していく。境界線を描いて自分の心にぴたっと合った形体が表せた時は，気持ちが落ち着き，安心感が訪れる場合もある。

また黒という単色であることから，情緒性を排除し，対象との距離をとりながら安全に表現していけるので，不安が強くてコントロールが必要なクライエントにも向いていると考えられている。

Lusebrink（1992）は，この点に照らしてＫＦＤ（動的家族画）が黒鉛筆で描かれる理由について言及している。すなわち家族メンバーに対しては往々にして複雑な葛藤や思いがあり，家族画ではそれらに対峙しなければならない。その際，黒鉛筆は境界線を作りやすく，感情を引き出さないタイプの素材なので，家族画に適していると述べている。もしそれでも感情が揺さぶられるようであれば，鉛筆で描かず，もっと構成的な「素材」，例えばそれぞれの家族成員に合った色紙を切り抜いて貼るといった課題が適切かもしれず，そのほうが，より情緒的な混乱を避けて，家族と距離をとって表現が可能になるかもしれないと論じている。

しかしながら，一方で黒鉛筆は，形体を描きやすいからこそ，「写実への憧れ」が高まり，うまく描けないことへの不満やストレスがたまる場合もあることが観察されている（市来，2009）。また，市来（2012）が日本の心理士と米国のアートセラピストを対象に「素材」の印象について評定させた調査では，黒鉛筆は，パステルに比べると粘土と折り紙同様，有意に「疲れる」という結果となった。また他に比べて最も「元気がでない」素材としてそれらの臨床家に評価された。「元気がでない」は，沈静化効果かもしれず，少なくとも活気を刺激する作業ではない可能性が示された。

従来心理的負担が少なく抑制的と考えられていた黒鉛筆であるが，それが個人に対してどのように働くかをみていくことが有用なアセスメントを可能にすると思われる。個人によっては，ストレスを感じたり集中後の疲労などを誘発する可能性もあり，ＰＤＩの重要性がここにある。また，市来（2009）の観察では，鉛筆の感情抑制的特徴を打破するかのごとく，シャシャと音をたてて鉛筆を反復運動によって上下に動かし彩色していくことで解放を試みる人もいた。これはクライエントが，「素材」が本来持つ特性とは逆のベクトルで表現しようとしていることを意味し，問題解決の様式の表れと考えられた。

またもうひとつ，興味深い結果として，黒鉛筆が「use personal symbol（個人的なシンボルを用いる）の項目において，米国のアートセラピストでは他の「素材」よりも有意に評定が高かった（市来，2012）。これは黒鉛筆が個人的なシンボルや意味を表出しやすい「素材」であるとアートセラピストが評価していることを意味する。つまり，黒鉛筆は抑制的で対象との距離をとれるという安全感からか，あるいは直接的な表現となり得るからか確かではないが，投影描画法にふさわしい個人特有のイメージを映し出しやすい「素材」であり，利便性だけではない使用理由が再確認されたと言ってもよかろう。

このように，黒鉛筆の特性を多面的に理解し，被検査者がその「素材」とどのように相互作用するかという創作過程をみることで，パーソナリティや心理状態がより鮮明に見えてくると考えられる。

4. 2. 2. 作者の心理的エネルギーの表出に関する留意点

それぞれの描画法はその時代に発祥地で入手が容易な紙を使用するのは当然のことである。ヨーロッパとアメ

リカの紙の縦横の比やサイズは微妙に異なるが，日本に持ってきた時には，だいたいＡ４になるので，ＨＴＰやＫＦＤはＡ４となる。日本で事務用品の中でかつては主流であったＢ５版もＡ４に移行した。実際の現場では安価なＡ４のコピー紙を用いることもあるかもしれないが，画用紙とコピー紙，またケント紙では，質感が相当に異なるし，また画用紙を差し出すのとコピー用紙ではクライエントに与える表現への期待感は違ってくる。どれも質について明確な規定はないものが多いが施行の際には配慮が必要である。

紙の大きさについては，市来・内藤・金井（2005）が，The Diagnostic Drawing Seriesの日本への適用のために，日本の８つ切りサイズで大学生に描いてもらった描画を，2.6倍のアメリカサイズの元法で描いてもらった場合と比較した。結果は，形式分析（ＤＡＦ）における項目で，概ねサイズによる違いは認められず，絵の構造的な面での違いはなかったが，内容が風景や自然が若干多くなったり，追加的に描きこんで画面に浮遊するような描画過程になったりすることが明らかとなった。つまり健常の大学生では与えられたサイズに自分の心的エネルギーをある程度調節して表現できることを示している。

ＥＴＣ理論のスペクトラム上では，両極に大小の紙を配置し，大きな紙のほうが，開放的でより退行的表現が生まれやすくクライエントが消費するエネルギーも大きいと仮定する。

しかしながら心理的エネルギーの消費について，考えるべき点は紙の大きさだけではない。まず検査場面で１枚のみ描いてもらうか，複数作品かという点があり，本研究で挙げた描画法のうちＨＴＰ以外は，全て１枚のみの描画である。そしてもう１つ考慮しなければいけないのは，近藤（2011）が述べているように１枚につき，いくつのアイテムを描かせるかという視点である。１枚につき１つのアイテムを描かせる「単数課題画」と複数のアイテムを描かせる「複数課題画」があり，後者のほうがアイテム同士の関連付けでGestaltを構成するために，描き手に負担がかかるとしている。

Buck（1966）のＨＴＰでは，１枚に１つのアイテムだが，第１系列で３枚，そして第２系列で色彩素材（クレヨンなど）でもう一度描いてもらうので，当然負担も増す。また高橋（1967）のＨＴＰＰも全体では４枚となり，負担も増すために，紙は当時主流であった小さめのＢ５で設定されたのかもしれない。このような視点から考えると，「紙の大きさ」だけでなく，「複数枚にわたる課題なのか」「１枚につきいくつのアイテムを描くのか」についても考慮に入れ，クライエントの心理的エネルギー消費との関連でアセスメントの結果を眺めていく必要があろう。

4.2.3. サインペン，クレヨン，絵の具について

５種類の描画法の中では，療法的な意味合いの強い風景構成法や療法的な目的で使用する場合の家族画の用具に関するルールはかなり柔軟であり，サインペンや色鉛筆，クレヨンや絵の具も使用可能である。基本的にはクライエントに選択させるのであろうが，風景構成法の場合は，統合失調症の場合のクレヨンの色数などについては指示が記載されている。

「素材」は「クライエントに合わせて適宜提供」あるいは「クライエント自らが主体的に選択」が理想ではあるが，その前にこれらの「素材」がクライエントに及ぼす影響について何を知らなければならないのであろうか？

前述のＥＴＣ理論を基礎とするHints（2009）の図３をみると，色鉛筆よりもクレヨンのほうが，クレヨンよりクレパス（oil pastel）のほうが，より流動的で，情動的（affective）な体験をもたらし，さらに絵の具のほうがその方向性が強いとされる。しかしLusebrink（1978）は単に「素材」だけでなく，その「素材」を規定する要因（Media dimension Variables：ＭＤＶ）として，次の４つの変数を挙げている。１）課題の複雑性（task-complexity）：その課題を遂行するために必要な身体的，精神的作業工程の程度　２）作品と距離感（reflective distance）：作者がどの程度作品と距離を保って創作できるか　３）「素材」へのアクセスが直接的か間接的かどうか（mediated or non-mediated）：筆などの道具の使用　４）「素材」固有の特性（量や境界など）

例えば，風景構成法で，クライエントが絵の具を選択した場合でも，絵の具の全体量や水分量，大きい筆を選ぶかどうかによって，「流動性」の方向をもつ開放的な表現を望んでいるのかどうかがわかる。反対に水彩絵の具を硬く細い筆をとって精密に描こうとするならば「作品と「素材」との距離感」は増し，軸上は右寄りとなる。その場合，流動的な「素材」をあえて統制的に描こうとする様子からクライエントの葛藤が見えてくるかもしれない。あるいは，そのような複雑な工程に挑戦するだけ十分に芸術的な志向や人格の成熟（あるいは技術や経験）を有しているのかもしれない。このように複雑な描画行動は，スペクトラム上の「素材」の特性とＭＤＶを総合的に判断し，さらに前述のＰＤＩの内容も加味して理解する必要がある。

またここでは，色彩の要素は示されていないが，「素材」は必ず色を伴う有形物であるから，その色数や何色かによって軸上は移動すると推察される。

療法として描画を使用する場合，クライエントが選択した「素材」，あるいはこちらが提供する「素材」がどのような特性を持っているのかについて理解しておくことが重要である。

5．まとめと今後の課題

主要な描画法の「素材」や創作過程に対するとらえ方を検討した結果，考案者によって「素材」の質や紙などへの配慮および創作過程への着目の程度に違いがあった。描画法の中には描画態度や抹消などの行動観察の必要性について言及しているものがあるものの，その内容は限定的であり，描画中の行動観察からアセスメントを行うアプローチがこれまで明確に論じられてこなかったことを示している。

そこで「素材」の視点を導入することで，個々の素材に関する仮説とそれに対する反応の個人差から創作かていを俯瞰し，新たにアセスメントの方略を展開できる可能性が示唆された。

例えば描画法の中で，最も使用されている黒鉛筆についてＥＴＣ理論から検討したところ，黒鉛筆は抑制的で，安全な素材であるが，同時にストレスや集中後の疲労などを誘発する可能性もある。このような仮説を持ちながら，被験者がどのように「素材」と相互作用するかを行動観察したり，それについてのＰＤＩを丁寧に検討することによって，被験者の感情状態や問題解決の様式がより明確になると思われた。

そもそも描画によるアセスメントは，元来療法的な意味合いも強く，その場合は創作空間を充実させるために様々な「素材」や技法を用いる場合も多い。また昨今は欧米のアートセラピーの実践の流入によって様々な技法が学会などでも散見される。

その際に，様々な「素材」の持つ特性を明らかにしておくことが重要であり，今後は作品分析だけでなく，創作過程における多様な被験者の反応について，量的および質的研究の蓄積が求められるところである。

実際,「素材」は実は商品でもあり，メーカーによって物理的な成分の違いがあり質感や発色が異なる。また「素材」には常に色がつきまとい，色彩の影響と切り離せない関係にある。複雑な要因の影響を受けて成立する描画行動に対して,「素材」への視点は今後ますます重要度を増すと考え，更なる研究が待たれるであろう。

引用文献

Bolander, K. 1977 Assessing Personality through Tree Drawing. Basic Books.（ボランダー，K．高橋依子（訳）1999　樹木画によるパーソナリティの理解　ナカニシヤ出版）

Buck, J. N. 1948: The HTP Teqnique, a qualitative and scoring manual. *J. Clin. Psychol.* **4**; 317-396.（加藤孝正，荻野恒一（訳）1982　ＨＴＰ診断法　新曜社）

Buck, J. N. 1966 The House Tree Person projective technique. Revised manual, Cali..: Western Psy-chological Service.

Burns, R. C. & Kaufman, S. H. 1972 *Actions, styles and symbols in Kinetic family Drawings*（*K-F-D*）*: An interpretative manual*. N.Y: Brunner-Mazel.（バアンズ，R. C. &カウフマン，S. H. 加藤孝正・伊倉日出一・久保義和（訳）1975. 子どもの家族画診断　黎名書房）

Hammer, E. F. 1958 The Clinical Application of Projective Drawings. Springfield, III: Charles C. Thomas.

Hammer, E. F. 1969 Hierarchical organization of personality and the H-T-P, achromatic and chromatic. In Buck, J. N. and Hammer, E. F.（eds）. *In Advances in the House-Tree-Person technique: Variations and applications*. CA: Western Psychological Services.

Hintz, L. 2009 The Expressive Therapies Continuum: A Framework for using Art in Therapy. New York: Routledge, Taylor, and Francis Group.

Hulse, W. C. 1951 The emotionally disturbed child draws his family. Quarterly. *Journal of Child Be-havior*, **3**: 152-174.

市来百合子・内藤あかね・金井菜穂子　2005　The Diagnostic Drawing Series（ＤＤＳ）における　紙のサイズによる描画表現の比較―DDSの日本における適用への模索　日本芸術療法学会誌，**36**（１，２）　65-71.

市来百合子　2009　描画検査場面における画材の違いによる創作過程の変化　甲子園大学紀要，**37**，153-160.

市来百合子　2010　心理臨床に「素材」の視点を導入する意義と方法について―女子大学生の症例へのＥＴＣ理論からの検討―　甲子園大学紀要，**38**，109-118.

市来百合子　2012　アートセラピーにおける素材の臨床心理学的研究　甲子園大学大学院人間文化学研究科　博士学位論文

皆藤章　1997　風景構成法　その基礎と実践　誠信書房

加藤孝正　1987動的家族画（ＫＦＤ）による治療　臨床描画研究II，78-90.

岸本寛史 2010 Karl Koch“Der Baum test”　臨床心理学**10**-3；470-473.

Koch, K. 1957 *Der Baumtest: der Baumzeichen versuch als psychodiagnostisches* Hilfsmittel 3. Auflage Verlag Hans Huber, Bern.（カールコッホ　岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男（訳）2010　バウムテスト（第３版）―心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究 誠信書房）

近藤孝司　2011　描画法の描画過程と描画体験に関する一考察　中京大学心理学研究科・心理学部紀要　**11**，29-42.

Kramer, E. & Schehr, J.1983 An Art Therapy Evaluation Session for Children. *American Journal of Art Therapy*, **23**, 3-10.

Lusebrink, V. B. 1990 *Imagery and visual expression in therapy*. New York: Plenum Press.

Lusebrink, V. B. 1992 A system oriented approach to the expressive therapies: The expressive thera-pies continuum. Arts in Psychotherapy, **18**(5), 395-403.

Machover, K. 1949 Personality Projection in the Drawing of the Human Figures, Ill: Charles C. Thomas.

Moon, C.H. 2010 *Materials and Media in Art Therapy Critical understanding of diverse artistic vocabu-laries*. New York: Taylor and Francis Group, an Information business.

中井久夫　1970　精神分裂病者の精神療法における描画の使用　芸術療法，**2**，77-90.

中井久夫　1997 風景構成法　山中康裕（編著）風景構成法その後の発展　岩崎学術出版社　3-26.

小川俊樹　2008　概説　今日の投影法をめぐって　小川俊樹（編）投影法の現在　現代のエスプリ別冊　5-20

杉浦京子・香月奈々子・鋤柄のぞみ　2003　投影描画法テストの動向と展望　日本芸術療法学会誌，**34**，5-37.

高橋依子　1986　描画テストの実施法　臨床描画研究 **1**，130-139.
高橋雅春　1967　描画テスト診断法　文教書院
高橋雅春　1974　描画テスト入門―ＨＴＰテスト―　文教書院
山中康裕　1984　風景構成法事始め　山中康裕（編集）風景構成法　岩崎学術出版社　1-36.